

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2002-063988

(43)Date of publication of application : 28.02.2002

(51)Int.Cl.

H05B 33/14
C09K 11/06
H05B 33/22

(21)Application number : 2000-250684

(71)Applicant : TORAY IND INC

(22)Date of filing : 22.08.2000

(72)Inventor : KOHAMA TORU
NISHIYAMA TAKUYA
MAKIYAMA AKIRA**(54) LIGHT EMITTING ELEMENT****(57)Abstract:**

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a light emitting element having high luminous efficiency, high brightness, and excellent color purity.

SOLUTION: The element emitting light with electrical energy has a luminescent substance between a positive electrode and a negative electrode. The element itself includes at least one sort of organic phosphors among an organic phosphor having a pyrene skeleton introduced with a substitution group having high volume, and an organic phosphor having the pyrene skeleton introduced with a substitution group which has a higher volume by three-dimensional solid rebounding against other substitution groups or the pyrene skeleton.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

BEST AVAILABLE COPY

일본공개특허공보 특개2002-63988호 사본 각1부

[첨부그림 1]

(10) 日本国特許庁 (JP)		(12) 公開特許公報 (A)		(11) 特許出願公開番号 特開2002-63988 (P2002-63988A)	
(43) 公開日 平成14年2月28日 (2002.2.28)					
(51) Int. Cl. ⁷		識別記号		FI	
H 0 5 B 33/14				H 0 5 B 33/14	
C 0 9 K 11/08		6 1 0		C 0 9 K 11/08	
H 0 5 B 33/22				H 0 5 B 33/22	
				B	
審査請求 未請求 請求項の数 8 O L (全 8 頁)					
(21) 出願番号		特開2000-250684 (P2000-250684)		(71) 出願人 000003198 東レ株式会社 東京都中央区日本橋本町2丁目2番1号	
(22) 出願日		平成12年8月22日 (2000.8.22)		(72) 発明者 小嶋 亨 静岡県大津市国山1丁目1番1号 東レ株式会社静岡事業管内	
				(72) 発明者 西山 卓哉 静岡県大津市国山1丁目1番1号 東レ株式会社静岡事業管内	
				(72) 発明者 横山 剛 静岡県大津市国山1丁目1番1号 東レ株式会社静岡事業管内	
				Fターム (参考) 3E007 AB03 AB04 BA06 CA01 CB01 DA01 DB03 EB00	
(54) 【発明の名称】 噴光電子					

(54) 【発明の名称】 発光素子

【課題】 発光効率が高く、高輝度で色純度が高れた、発光素子を提供する。

【解決手段】 正極と負極の間に発光物質が含有し、電気エネルギーにより発光する素子であって、該素子がそれ自身が立体的に最高い置換率の導入されたピレン骨格を有する有機蛍光体、他の置換基あるいはピレン骨格との立体反応により最高なる置換率の導入されたピレン骨格を有する有機蛍光体の少なくとも1種を含むことを特徴とする発光素子。

【특許請求의範圍】

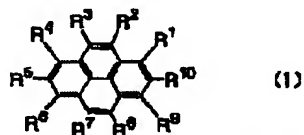
【請求項 1】 正極と負極の間に発光物質が存在し、電圧エネルギーにより発光する素子であって、該素子が、それ自身が立体的に高い置換基の導入されたピレン骨格を有する有機蛍光体、他の置換基あるいはピレン骨格との立体反発により高くなる置換基の導入されたピレン骨格を有する有機蛍光体の少なくとも1種を含むことを

特徴とする発光素子。

【請求項 2】 ピレン骨格を有する有機蛍光体が下記一般式(1)で表されることを特徴とする請求項1記載の発光素子。

【化1】

【化1】



(ここでR1~R10はそれぞれ、水素、アルキル基、シクロアルキル基、アラルキル基、アルケニル基、シクロアルケニル基、アルキニル基、水酸基、メルカプト基、アルコキシ基、アルキルチオ基、アリールエーテル基、アリールチオエーテル基、アリール基、複素環基、ハロゲン、ハロアルカン、ハロアルケン、ハロアルキン、シアノ基、アルデヒド基、カルボニル基、カルボキシル基、エステル基、カルボモイル基、アミノ基、ニトロ基、シリル基、シロキサンニル基の中から選ばれる。またR1~R10の少なくとも1つはアルキル基、アラルキル基、アルケニル基、シクロアルケニル基、シクロアルキル基、アリール基である。)

【請求項 3】 R1~R10の少なくとも1つがアルキル基であることを特徴とする請求項2記載の発光素子。

【請求項 4】 R1~R10の少なくとも1つがシクロアルキル基であることを特徴とする請求項2記載の発光素子。

【請求項 5】 R1~R10の少なくとも1つがアリール基であることを特徴とする請求項2記載の発光素子。

【請求項 6】 該有機蛍光体が発光材料であることを特徴とする請求項1記載の発光素子。

【請求項 7】 該有機蛍光体が電子輸送材料であることを特徴とする請求項1記載の発光素子。

【請求項 8】 マトリクスおよび/またはセグメント方式によって表示するディスプレイであることを特徴とする請求項1記載の発光素子。

【0001】

【発明の背景を説明する】 本発明は、電気エネルギーを光に変換できる素子であって、表示素子、フラットパネルディスプレイ、バックライト、照明、インテリア、顕微鏡、撮像、電子写真機、光信号発生器などの分野に利用可能な発光素子に関する。

【0002】

【従来の技術】 陰極から注入された電子と陽極から注入された正孔が両極に挟まれた有機蛍光体内で再結合する際に発光するという有機薄膜発光素子の研究が近年活発に行われている。この素子は、薄型、低駆動電圧下での高輝度発光、発光材料を選ぶことによる多色発光が特徴であり注目を集めている。

【0003】 この研究は、コダック社のC. W. Tangらが有機薄膜発光素子が高輝度に発光することを示して以来(Appl. Phys. Lett., 51 (12) 21, p. 913, 1987)、多くの研究機関が検討を行っている。コダック社の研究グループが提示した有機薄膜発光素子の代表的な構成は、ITOガラス基板上に正孔輸送性のジアニン化合物、発光層である8-ヒドロキシキノリンアルミニウム、そして陰極としてMg:Agを順次塗付したものであり、10V程度の駆動電圧で10000 cd/m²の緑色発光が可観であった。現在の有機薄膜発光素子は、上記の素子構成要素の他に電子輸送層を設けているものなど種々変えていられるものもあるが、基本的にはコダック社の構成を踏襲している。

【0004】 発光層はホスト材料のみで構成されたり、ホスト材料にゲスト材料をドーピングして構成される。発光材料は三原色発光することが求められているが、これまでは緑色発光材料の研究が最も進んでいる。現在は赤色発光材料と青色発光材料において、特性向上を目指して鋭意研究がなされている。特に青色発光材料において高輝度で色純度の良い発光の得られるものが望まれている。

【0005】 ホスト材料としては、前述のトリス(8-キノリノリノラト)アルミニウムを始めとするキノリノール誘導体の金属錯体、ベンズオキサゾール誘導体、スチルベン誘導体、ベンズチアゾール誘導体、チアジアゾール誘導体、チオフェン誘導体、テトラフェニルブタジエン誘導体、シクロペンタジエン誘導体、オキサジアゾール誘導体、オキサジアゾール誘導体金属錯体、ベンズアゾール誘導体金属錯体などがあげられる。

【0006】 青色発光ホスト材料においては、比較的良好な特性が得られている例として、キノリノール誘導体と異なる配位子を組み合わせた金属錯体(特開平5-214,832号公報)や、ビスチリルベンゼン誘導体(特開平4-117,485号公報)などがあげられるが、特に色純度が充分ではない。

【0007】 一方、ゲスト材料としてのドーパント材料には、レーザー色素として有用であることが知られている。7-メチルアミノ-4-メチルキノリンを主成分とするキノリン誘導体、ペリレン、ピレン、アントラセンなどの融合芳香環誘導体、スチルベン誘導体、オリゴフェニレン誘導体、フラン誘導体、キノロン誘導体、オキ

サゾール誘導体、オキサジアゾール誘導体などが知られている。

[0008]

(発光が解決しようとする課題) しかし、従来の技術に用いられる発光材料は、有機材料、ドーパント材料) には、発光効率が低く消費電力が大きいものと、耐久性が低く素子寿命の短いものが多かった。また、フルカラーディスプレイとして赤色、緑色、青色の三原色発光が求められているが、赤色、青色発光においては、発光波長を満足させるものが少なく、発光ピークの幅も広く色純度が良いものは少ない。中でも青色発光において、耐久性に優れた十分な輝度と色純度特性を示すものが必要とされている。

【０００９】本発明は、かかる従来技術の問題を解決し、発光効率が高く、高輝度で色純度に優れた発光素子を提供することを目的とするものである。

[0010]

【課題を解決するための手段】本発明は、正価と負価の間に発光物質が存在し、電圧をバルクにより発光する素子であって、該素子が、その自身が立体的に高い置換基の導入されたビレン骨格を有する有機発光体、他の置換基あるいはビレン骨格との立体反発により高くなる置換基の導入されたビレン骨格を有する有機発光体の少なくとも1種を含むことを特徴とする発光素子である。

【0011】

【発明の実施の形態】本発明において正極は、光を取り出すために透明であれば酸化銀、酸化インジウム、酸化錫・インジウム（ITO）などの導電性金属酸化物、あるいは金、銀、クロムなどの金属、ヨウ化銀、硫化銅などの無機導電性物質、ポリチオフェン、ポリピロール、ポリアニリンなどの導電性ポリマーと特に限定されるものではない。ITOがガラスやセラミックスを用いることが特に望ましい。透明電極の抵抗は素子の発光に十分な電圧が供給できればよいので厚さされないことが望ましい。例えば300Å/以下の場合ITO層であれば素子電極として焼結するが、現在では100Å/程度の層の供給も可能になっていることから、焼結良品を使用することが特に望ましい。ITOの厚さは抵抗値に合わせずに任意に選ぶ事ができるが、通常100〜300nmの膜で用いられることが多い。また、ガラス基板はソーライムガラス、無アルカリガラスなどを用いる、また厚みも機械的強度を保つのに十分な厚さがあればよいので、0.3mm以上あれば十分である。ガラスの材質については、ガラスからの溶出イオンが少ない方がよいので無アルカリガラスの方が好ましいが、S-1.02などのバリアコードを施したソーライムガラスと市販されているのでこれを可以使用。ITO膜形成方法は、電子線ビーム法、スパッタリング法、化学反応法など特に制限を受けるものではない。

【0012】本発明において陰極は、電子を本有機物層に効率良く注入できる物質であれば特に限定されないが、一般に白金、金、銀、鉄、錫、亜鉛、アルミニウム、インジウム、クロム、リチウム、ナトリウム、カルシウム、カルシウム、マグネシウムなどがあげられるが、電子注入効率をあげて寿命特性を向上させるためにはリチウム、ナトリウム、カルシウム、カルシウム、マグネシウムまたはこれら低仕事関数金属を含む合金が有効である。しかし、これらの低仕事関数金属は、一般に大気中で不安定であることが多く、例えば、有機層に接触のリチウムやマグネシウム（空気湿気の膜厚計示で1nm以下）をドーピングして高電圧の高い電圧を使用する方法が好ましい例として挙げることができるが、フッ化リチウムのような無機物の使用も可能であることから特にこれらに限定されるものではない。更に電極保護のために白金、金、銀、鉄、錫、アルミニウム、インジウムなどの金属、またはこれら金属を用いた合金、そしてシリカ、チタニア、窒化ケイ素などの無機物、ポリビニルアルコール、塩化ビニル、塩化水素系分子などを積層することが好ましい例として挙げられる。これらの電極の作製法も抵抗加熱、電子線ビーム、スパッタリング、イオンプレーティング、コーティングなど諸道を取ることができれば特に制限されない。

【００１３】本発明において発光物質とは、１）正孔輸送層／発光層、２）正孔輸送層／発光層／電子輸送層、３）発光層／電子輸送層、４）正孔輸送層／発光層／正孔阻止層、５）正孔輸送層／発光層／正孔阻止層／電子輸送層、６）発光層／正孔阻止層／電子輸送層そして、
 ７）以上の組み合わせ物質を一層に二重化した形態のいずれであってもよい。即ち、素子構成としては、上記１）～５）の多層積層構造の他に７）のように発光材料層単独または発光材料と正孔輸送材料や電子輸送材料を含む層を一層設けるだけでもよい。さらに、本発明における発光物質は自ら発光するもの、その発光を助けるもののいずれにも該当し、発光に関与している化合物、層などを指すものでも好し。

【0014】本発明において正孔輸送層は正孔輸送性物質または二種類以上の物質を溶解、混合するか正孔輸送性物質と高分子溶解性の混合物により形成される。正孔輸送性物質としては電界を印加した電極層において正極から正孔を効率的に輸送することが必要で、正孔注入効率が高く、注入された正孔を効率的に輸送することが望ましい。そのためにロニオンポテンシャルが小さく、しかも正孔移動障壁が大きく、さらに安定性に優れ、ドロップとなる不純物がほとんどおよび使用時に発生しにくい物質であることが要求される。このような条件を満たす物質として、特に好適されるものではないが、 N,N' -ジフェニル-N,N'-スズ(3-メチルフェニル)4-4'-ジフェニル-1,1'-ジアミン

N, N' - ジナフチル - N, N' - ジフェニル - 4, 4' - ジフェニル - 1, 1' - ジアミンなどのトリフェニルアミン類、ビス (N-アリルカルバゾール) またはビス (N-アルキルカルバゾール) 類、ピラゾリン誘導体、スチルベン系化合物、ヒドラゾン系化合物、オキワジアゾール誘導体やフタロシニン誘導体、ボルフィリン誘導体に代表される複素環化合物、ポリマー系では前記化合物を側鎖に有するポリカーボネートやスチレン誘導体、ポリビニルカルバゾール、ポリシランなどが好ましいが、素子作製に必要な薄膜を形成し、正極から正孔が注入でき、さらに正孔を輸送できる化合物であれば特に限定されるものではない。

【0015】本発明における発光材料はホスト材料のみでも、ホスト材料とドーパント材料の組み合わせでも、いずれであってもよい。また、ドーパント材料はホスト材料の全体に含まれていても、部分的に含まれていても、いずれであってもよい。ドーパント材料は積層されていても、分散されていても、いずれであってもよい。

【0016】本発明において発光材料は、それ自身が立体的に高い置換基の導入されたビレン骨格を有する有機発光体、他の置換基あるいはビレン骨格との立体反発により高くなる置換基の導入されたビレン骨格を有する有機発光体の少なくとも1種を含む。

【0017】ビレン骨格は平面性が高いので結晶性が高く、アモルファス状態において結晶化が進行しやすい。結晶化による薄膜の破壊は厚膜の低下あるいは発光状態をもたらしてしまう。また、平面性が高いということはエキシマーを生成しやすく、薄膜にすると単分子での光スペクトルに比べて長波長化してしまう。そこで、それ自身が立体的に高いか、ビレン骨格あるいは他の置換基との立体反発を有することで高くなる置換基を導入することで、結晶化やエキシマーの生成を抑えることが必要である。

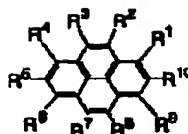
【0018】それ自身が高い置換基は、例えば1-ブチル基やノルボルニル基、アダマンチル基などがあげられ、立体的な構造を有し、ビレン骨格同士の接近を妨げるものである。また、ビレン骨格との立体反発を有することで高くなる置換基は、例えばナフチル基やローメチルフェニル基のように、立体反発を有することでビレン骨格と同一平面に位置できなくなり、その結果ビレン骨格同士の接近が妨げられるものである。立体反発は置換基とビレン骨格だけでなく、置換基同士で生じていても構わない。

【0019】それ自身が立体的に高い置換基の導入されたビレン骨格を有する有機発光体や他の置換基あるいはビレン骨格との立体反発により高くなる置換基の導入されたビレン骨格を有する有機発光体は具体的には下記一般式 (1) で表される。

【0020】

【化2】

【化1】



(1)

【0021】ここでR1~R10はそれぞれ、水素、アルキル基、シクロアルキル基、アラルキル基、アルケニル基、シクロアルケニル基、アルキニル基、水酸基、メルカプト基、アルコキシ基、アルキルチオ基、アリールエーテル基、アリールチオエーテル基、アリール基、複素環基、ハロゲン、ハロアルカン、ハロアルケン、ハロアルキン、シアノ基、アルデヒド基、カルボニル基、カルボキシル基、エステル基、カルバモイル基、アミノ基、ニトロ基、ソリル基、シロキシル基の中から選ばれる。またR1~R10の少なくとも1つはアルキル基、アラルキル基、アルケニル基、シクロアルケニル基、シクロアルキル基、アリール基である。

【0022】これらの置換基の内、アルキル基とは例えばメチル基、エチル基、プロピル基、ブチル基などの飽和脂肪族炭化水素基を示し、これは無置換でも置換されていても構わない。また、シクロアルキル基とは例えばシクロプロピル、シクロヘキシル、ノルボルニル、アダマンチルなどの飽和脂環式炭化水素基を示し、これは無置換でも置換されていても構わない。また、アラルキル基とは例えばベンジル基、フェニルエチル基などの脂肪族炭化水素を介した芳香族炭化水素基を示し、脂肪族炭化水素と芳香族炭化水素はいずれも無置換でも置換されていても構わない。また、アルケニル基とは例えばビニル基、アリール基、ブタジエニル基などの二重結合を含む不飽和脂肪族炭化水素基を示し、これは無置換でも置換されていても構わない。また、シクロアルケニル基とは例えばシクロペンタジエニル基、シクロヘキセン基などの二重結合を含む不飽和脂環式炭化水素基を示し、これは無置換でも置換されていても構わない。また、アルキニル基とは例えばアセチニル基などの三重結合を含む不飽和脂肪族炭化水素基を示し、これは無置換でも置換されていても構わない。また、アルコキシ基とは例えばメトキシ基などのエーテル結合を介した脂肪族炭化水素基を示し、脂肪族炭化水素基は無置換でも置換されていても構わない。また、アルキルチオ基とはアルコキシ基のエーテル結合の酸素原子が硫黄原子に置換されたものである。また、アリールエーテル基とは例えばフェノキシ基などのエーテル結合を介した芳香族炭化水素基を示し、芳香族炭化水素基は無置換でも置換されていても構わない。また、アリールチオエーテル基とはアリールエーテル基のエーテル結合の酸素原子が硫黄原子に置換されたものである。また、アリール基とは例えばフェニル基、ナフチル基、ピフェニル基、フェナントリル基、ターフェニル

성, 비닐기 등의芳香族炭化수소를 표시, 이는無置換でも置換されていてもかまわない. また, 複素環성とは例えばフリル성, 치에닐성, 오キサ졸리성, 피리질성, 퀴놀리성, 카르바질성などの炭素以外の原子を有する環状構造성을 표시, 이는無置換でも置換されていてもかまわない. ハロゲンとはフッ素, 염素, 臭素, ヨ오素を示す. ハ로알칸, ハ로알케인, ハ로알킨とは例えばトリフル오메チ성などの, 前述의 알킬성, 알케닐성, 알키닐성の一部あるいは全部が, 前述의 ハロゲンで置換されたものを 표시, 残りの部分は無置換でも置換されていてもかまわない. 알데히드성, 카르보닐성, 에스테르성, 카르보닐성, 아미노성には脂肪族炭化수소, 脂環式炭化수소, 芳香族炭化수소, 複素環などで置換されたものも含み, さらに脂肪族炭化수소, 脂環式炭化수소, 芳香族炭化수소, 複素環は無置換でも置換されていてもかまわない. シリ성とは例えばトリ메チルシリ성などの

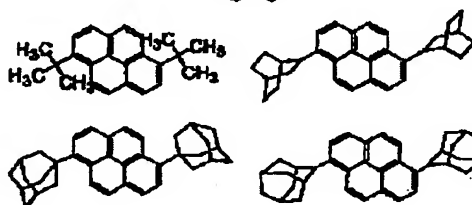
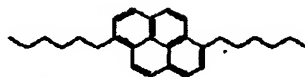
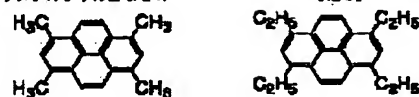
ケイ素化合物성을 표시, 이는無置換でも置換されていてもかまわない. シロキサ닐성とは例えばトリ메チルシロキサ닐성などのエーテル結合を介したケイ素化合物성을 표시, 이는無置換でも置換されていてもかまわない. また, 置換置換성との間に環構造を形成しても構わない. 形成される環構造は無置換でも置換されていてもかまわない.

【0023】それ自身が立体的に嵩高いが, 他の置換성あるいはビレン骨格との立体反発を有することで嵩高くなる置換성としては, 酸素, 窒素, 硫黄等の原子は非共有電子対を有しており, 分子의 極性を大きく変化させることがあるので, 炭化수소성が好ましい. 中でもアル킬성, シクロアル킬성, アリール성が好ましい.

【0024】上記의 비렌骨格を有する有機體光体として, 具体的には下記のような構造があげられる.

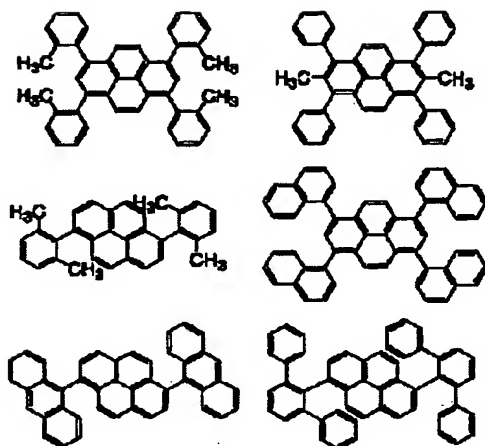
【0025】

【化3】



【0026】

【化4】



【0027】비렌骨格を有する有機蛍光体はドーパント材料として用いてもかまわないが、優れた電子的送達を有することから、ホスト材料として好適に用いられる。

【0028】発光材料のホスト材料は本発明の有機蛍光体一種のみに限る必要はなく、複数のビレン骨格を有する有機蛍光体を混合して用いたり、既知のホスト材料の一種類以上をビレン骨格を有する有機蛍光体と混合して用いてもよい。既知のホスト材料としては特に限定されるものではないが、以前から発光体として知られていたアントラセン、フェナンスレン、ビレン、ペリレン、クリセンなどの縮合環誘導体、トリス(6-キノリノール)アルミニウムを主とするキノリノール誘導体の金属錯体、ペンズオキサゾール誘導体、スチルベン誘導体、ペンズチアゾール誘導体、チアジアゾール誘導体、チオフェン誘導体、テトラフェニルプタジエン誘導体、シクロペンタジエン誘導体、オキサジアゾール誘導体、ビススチルルアントラセン誘導体やジスチルルベンゼン誘導体などのビススチルル誘導体、キノリノール誘導体と異なる配位子を組み合わせた金属錯体、オキサジアゾール誘導体金属錯体、ペンズアゾール誘導体金属錯体、クマリン誘導体、ピロピリジン誘導体、ペリノン誘導体、チアジアゾロピリジン誘導体、ポリマー系では、ポリフェニレンビレン誘導体、ポリパラフェニレン誘導体、そして、ポリチオフェン誘導体などが使用できる。

【0029】発光材料に添加するドーパント材料は、特に限定されるものではないが、具体的には従来から知られている、フェナンスレン、アントラセン、ビレン、テトラセン、ペンタセン、ペリレン、ナフトピレン、シベンソピレン、ルブレネなどの縮合環誘導体、ペンズオキサ

ゾール誘導体、ペンズチアゾール誘導体、ペンズイミダゾール誘導体、ペンストリアゾール誘導体、オキサゾール誘導体、オキサジアゾール誘導体、チアゾール誘導体、イミダゾール誘導体、チアジアゾール誘導体、トリアゾール誘導体、ピラゾリン誘導体、スチルベン誘導体、チオフェン誘導体、テトラフェニルプタジエン誘導体、シクロペンタジエン誘導体、ビススチルルアントラセン誘導体やジスチルルベンゼン誘導体などのビススチルル誘導体、ジアザインダセン誘導体、フラン誘導体、ベンゾフラン誘導体、フェニルイソベンゾフラン、ジメチルイソベンゾフラン、ジ(2-メチルフェニル)イソベンゾフラン、ジ(2-トリフルオロメチルフェニル)イソベンゾフラン、フェニルイソベンゾフランなどのイソベンゾフラン誘導体、ジベンゾフラン誘導体、7-ジアリルアミノクマリン誘導体、7-ビベリゾノクマリン誘導体、7-ヒドロキシクマリン誘導体、7-メトキシクマリン誘導体、7-アセトキシクマリン誘導体、3-ペンズチアゾリルクマリン誘導体、3-ペンズイミダゾリルクマリン誘導体、3-ペンズオキサゾリルクマリン誘導体などのクマリン誘導体、ジシアノメチレンピラン誘導体、ジシアノメチレンチオピラン誘導体、ポリメチン誘導体、シアニン誘導体、オキソペンズアンラセン誘導体、キサンテン誘導体、ローダミン誘導体、フルオレセイン誘導体、ピリリウム誘導体、カルボスチルル誘導体、アクリジン誘導体、ビス(スチルル)ベンゼン誘導体、オキサジン誘導体、フェニレンオキサイド誘導体、キオクリドン誘導体、キナゾリン誘導体、ピロピリジン誘導体、フロピリジン誘導体、1, 2, 5-チアジアゾロピレン誘導体、ペリノン誘導体、ピロロピロール誘導体、スクアリウム誘導体、ピオラント

론誘導체, 페나진誘導체, 아크리돈誘導체, 자아프라빈誘導체などがそのまま使用できるが, 特にイソベンゾフラン誘導체가好適に用いられる.

【0030】本発明において電子輸送性材料は, 電界を与えられた電極間において負極からの電子を効率的に輸送することが必要で, 電子注入効率が高く, 注入された電子を効率的に輸送することが望ましい. そのためには電子親和力が大きく, しかも電子移動度が大きく, さらに安定性に優れ, トラップとなる不純物が製造時および使用時に発生しにくい物質であることが要求される. このような条件を満たす物質として, 本発明のビレン骨格を有する有機蛍光体や, 8-ヒドロキシキノリンアルミニウムに代表されるキノリノール誘導体金属錯体, トロロン金属錯体, フラボノール金属錯体, ペリレン誘導体, ペリノン誘導体, ナフタレン, クマリン誘導体, オキサジアゾール誘導体, アルダジン誘導体, ビスチリル誘導体, ビラジン誘導体, フェナントロリン誘導体などがあるが特に限定されるものではない. これらの電子輸送材料は単独でも用いられるが, 異なる電子輸送材料と積層または混合して使用しても構わない.

【0031】以上の正孔輸送層, 発光層, 電子輸送層に用いられる材料は単独で各層を形成することができるが, 高分子結晶としてポリ塩化ビニル, ポリカーボネート, ポリスチレン, ポリ(N-ビニルカルbazoon), ポリメチルメタクリレート, ポリブチルメタクリレート, ポリエステル, ポリスルホン, ポリフェニレンオキサ이드, ポリブタジエン, 炭化水素樹脂, ケトン樹脂, フェノキシ樹脂, ポリサルフォン, ポリアミド, エチルセルロース, 酢酸ビニル, ABS樹脂, ポリウレタン樹脂などの溶剤可溶性樹脂や, フェノール樹脂, キシレン樹脂, 石油樹脂, コリア樹脂, メラミン樹脂, 不飽和ポリエステル樹脂, アルキド樹脂, エポキシ樹脂, シリコン樹脂などの硬化性樹脂などに分散させて用いることも可能である.

【0032】本発明において発光物質の形成方法は, 抵抗加熱法, 電子ビーム法, スパッタリング, 分子蒸着法, コーティング法などに特に限定されるものではないが, 通常は, 抵抗加熱法, 電子ビーム法が特性面で好ましい. 層の厚みは, 発光物質の抵抗値にもよるので限定することはできないが, 1~100.0nmの範囲から選ばれる.

【0033】本発明において電気エネルギーとは主に直流電流を指すが, パルス電流や交流電流を用いることも可能である. 電流値および電圧値は特に制限はないが, 素子の寿命電力, 寿命を考慮するとできるだけ低いエネルギーで最大の輝度が得られるようにするべきである.

【0034】本発明においてマトリクスとは, 表示のための画素が格子状に配置されたものをいい, 画素の集合で文字や画像を表示する. 画素の形状, サイズは用途によって異なる. 例えばパソコン, モニター, テレビの画

像および文字表示には, 通常一辺が300μm以下の四角形の画素が用いられるし, 表示パネルのような大型ディスプレイの場合は, 一辺がmmオーダーの画素を用いることになる. モノクロ表示の場合は, 同じ色の画素を配列すればよいが, カラー表示の場合には, 赤, 青, 緑, 青の画素を並べて表示させる. この場合, 典型的にはデルタタイプとストライプタイプがある. そして, このマトリクスの駆動方法としては, 逐行駆動方法やアクティブマトリクスのどちらでもよい. 逐行駆動の方が構造が簡単であるという利点があるが, 動作特性を考慮した場合, アクティブマトリクスの方が優れる場合があるので, これも用途によって使い分けることが必要である.

【0035】本発明においてセグメントタイプとは, 予め決められた情報を表示するようにパターンを形成し, 決められた情報に発光させることになる. 例えば, デジタル時計や温度計における時刻や温度表示, オーディオ機器や電圧調整器などの動作状態表示, 自動車のパネル表示などがあげられる. そして, 前記マトリクス表示とセグメント表示は同じパネルの中に共存していてもよい.

【0036】本発明においてバックライトとは, 主に自発光しない表示装置の視認性を向上させる目的に使用され, 液晶表示装置, 時計, オーディオ機器, 自動車パネル, 表示板, 標識などに使用される. 特に液晶表示装置, 中でも薄型化が課題となっているパソコン用途のバックライトとしては, 従来のものが蛍光灯や導光板からなっていたのを薄型化が課題であることを考えると本発明におけるバックライトは, 薄型, 軽量が特徴になる.

【0037】

【実施例】以下, 実施例および比較例をあげて本発明を説明するが, 本発明はこれらの例によって限定されるものではない.

【0038】実施例1

ITO透明導電膜を150nm増設させたガラス基板(旭硝子(株)製, 150/10, 電子ビーム専用品)を30×40mmに切断, エッチングを行った. 得られた基板をアセトン, "セミコグリン56"(フルウチ化学(株)製)で各々15分間超音波洗浄してから, 蒸留水で洗浄した. 続いてインプロピルアルコールで15分間超音波洗浄してから熱メタノールに15分間浸漬させて乾燥させた. この基板を素子を作製する直前に1時間UV-オゾン処理し, 真空中で装置内に設置して, 装置内の真空度が5×10⁻⁵Pa以下になるまで排気した. 抵抗加熱法によって, まず正孔輸送材料として4, 4'-ビス(N-(m-トリル)-N-フェニルアミノ)ピブフェニルを50nm増設した. 次に発光材料として, 1, 3, 5, 8-テトラフェニルピレンを15nmの厚さに積層した. 次に電子輸送材料として, 2, 9-ジメチル

- 4, 7-ジフェニル-1, 10-フェナント린を35nmの厚さに積層した。次にリチウムを0.5nm有機層にドーピングした後、アルミニウムを200nm蒸着して基板とし、5×5mm角の素子を作製した。ここで言う膜厚は水晶振子膜厚モニター表示値である。発光特性として、輝度計、分光光度計、色彩色差計を用いて、輝度、発光スペクトル、CIE色度を測定した。この発光素子からは、最高輝度8530カンデラ/平方メートル、発光波長465.512nm、CIE色度(0.25, 0.37)の良好な青色発光が得られた。また上記発光素子を真空セル内で1mAパルス駆動(Duty比1/60、パルス時の電流値60mA)させたところ、良好な青色発光が確認された。

【0039】実施例2

発光材料として1, 3, 6, 8-テトラ(2-フェニル)ピレンを用いた例は実施例1と全く同様にして発光素子を作製した。この発光素子からは発光波長465nm、CIE色度(0.20, 0.27)の良好な青色発光が得られた。

【0040】実施例3

正孔輸送材料の蒸着までは実施例1と同様に行った。次にホスト材料として実施例1で用いた1, 3, 6, 8-テトラフェニルピレンを、ドーパント材料としてジ(2-メチルフェニル)イソペンゾフラン(発光ピーク波長は468nm)を用いて、ドーパントが1wt%になるように15nmの厚さに共蒸着した。次に電子輸送材料の蒸着からは実施例1と同様にして発光素子を作製した。この発光素子からは、ドーパント材料の発光スペクトルと同様の発光スペクトルが観察され、色純度の良好な高輝度青色発光が得られた。

【0041】実施例4

ITO透明導電膜を150nm増強させたガラス基板(旭硝子(株)製、150/□、電子ビーム蒸着品)を

30×40mmに切断、フォトリソグラフィ法によって300μmピッチ(繰り返し270μm)×32本のストライプ状にパターン加工した。ITOストライプの長辺方向片側は外部との電気的接続を容易にするために、27mmピッチ(開口部幅800μm)まで広げている。得られた基板をアセトン、セミコクリン56で各々15分間超音波洗浄してから、超純水で洗浄した。続いてイソプロピルアルコールで15分間超音波洗浄してから熱メタノールに15分間浸漬させて乾燥させた。この基板を素子を作製する直前に1時間UV-オゾン処理し、真空蒸着装置内に設置して、装置内の真空度が5×10⁻⁴Pa以下になるまで排気した。抵抗加熱法によって、まず正孔輸送材料として4, 4'-ビス(N-(メトリル)-N-フェニルアミノ)ビフェニルを50nm蒸着し、実施例1で用いた1, 3, 6, 8-テトラフェニルピレンを15nmの厚さに蒸着した。次に電子輸送材料として、2, 9-ジメチル-4, 7-ジフェニル-1, 10-フェナントリンを35nmの厚さに積層した。ここで言う膜厚は水晶振子膜厚モニター表示値である。次に厚さ500μmのコパル板にウエットエッチングによって16本の250μmの開口部(繰り返し50μm、300μmピッチに相当)を開けたマスクを、真空中でITOストライプに直交するようにマスク交換し、マスクとITO基板が密着するように表面から剥離で固定した。そしてリチウムを0.5nm有機層にドーピングした後、アルミニウムを200nm蒸着して32×16ドットマトリクス素子を作製した。本素子をマトリクス駆動させたところ、クロストークなく文字表示できた。

【0042】

【発明の効果】本発明は、発光効率が高く、色純度に優れた、発光素子を提供できるものである。特に青色発光にとって有効なものである。